

課題研究② 遊びと学び ゼロ 0から始まるド・レ・ミ♪

大阪府・認定こども園友渕児童センター 林 大介

1. はじめに

性別や世代を越え、国境を越えて存在する音楽。いつの時代でも奏で合い、歌われ、愛され続けてきた音楽は人類の文化とさえ言える。

日本では義務教育に音楽という科目があり、歌や音符を習い、鍵盤ハーモニカやリコーダーなど、様々な楽器も練習をする。さらに大概の幼稚園、保育園でも音楽活動が取り入れられ、幼い頃から音を楽しんでいる。

私たち認定こども園 友渕児童センターでは運動会にはマーチングやパーラック。発表会では合奏や歌はもちろん、和太鼓や5歳児では珍しいカスタネット奏、琉球舞踊で使われる四つ竹という楽器を持ち、演舞を披露する。それらを見て保護者の方々は我が子の成長した姿に大きな拍手を送り、子どもたちも達成感を感じている。

3年前、私たちは法人内での音楽活動の研究発表をする機会があり、幼児の音楽活動において、あそびを通したリズムあそびなどの取り組みや指導方法を実践形式で発表した。そうした経験がきっかけとなり、今まで行ってきた活動を職員間で話し合い、見つめ直す良い機会となったが、今回はさらに掘り下げて、私たちの普段の保育・教育活動を振り返り、“子どもたちにとって音楽とはなにか”“どのように音楽が取り入れられ、それが子どもたちにどのような影響を与えているか”について研究、実践、考察をしていきたい。

2. 乳児期の音との関わり

幼児教育・保育という枠組みの中で音楽という言葉を知ると、5歳児など、主に幼児に対するイメージが先行するが、年齢を遡ると乳児期、さらには母親のお腹の中にいる胎児の頃から“音”と出会っていると私たちは考える。それは母親の心音や鼓動である。その為、生まれてからも母親の左胸に耳をあてて心音を聴くことで安心感を抱き、眠りにつく赤ちゃんも多い。小さな物音にも敏感で、今度は驚いた様子で眠りから目を覚ます。このように乳児期の頃から、子どもたちは様々な音を聴くだけでなく、感情も動かしているのではないだろうか。ここでは、乳児期の子どもたちにとっての音楽を幅広い視点で考察してみる。

乳児期の子どもたちは成長していくにつれ、母親だけでなく様々な大人と出会う。保育者もその中の一人である。赤ちゃんは大人とスキンシップをとってふれあいながら、様々な音やリズムを知っていく。そして、繰り返

し行うことで、聴き慣れた音やリズムが心地よく感じられるようになり、母親以外の大人の声を聞き分けて記憶することを繰り返しながら、音を聞き分ける力が自然と身につく、音の識別能力を獲得していく。

私たちは、保育者の語りかけや歌いかけが如何に重要で必要であるかを深く認識しながら保育を行っている。

【楽器を鳴らすだけが音楽ではない】

0歳児クラスを覗いてみると、どこからともなく職員の良い子守唄が聞こえてきた。その横では、仰向けに寝る赤ちゃんの胸を静かにさすったり、一定のリズムで優しく手の平でトントンする保育者や、抱っこしながらゆっくりとしたリズムで体を揺らしている保育者がいる。聞き慣れた声の子守唄や胸に優しく伝わるわずかな振動が赤ちゃんの気持ちを落ち着かせ、安心した気持ちで入眠している姿が見られた。このような関わりを繰り返すことで、入園して間もない赤ちゃんとの信頼関係を少しずつ深めていくことになる。そして、信頼関係が深まるにつれ、赤ちゃんにとって保育者は一緒に過ごすことが心地よい存在になっていく。



授乳中にミルクを飲む赤ちゃんを見つめ、目を合わせながら保育者が優しく話しかけると、その言葉に答えるかのように、赤ちゃんが時折声を発している。すると、保育者も自然と赤ちゃんと同じように真似て声を発し、会話をするかのように話し掛ける。赤ちゃんは保育者の反応を見て、さらに声を発することを繰り返し、やりとりを楽しみながらコミュニケーションをとろうとする。赤ちゃんはお腹が満たされるだけでなく、心地よい聞き慣れた保育者の声と温もりを感じることで心も満た

され、より安心感を得ることになる。



保育者との信頼関係が深まると、子どもたちの方からコミュニケーションをとろうとするようになってくる。保育者と目が合うとニコリと微笑み、まるで保育者に呼びかけているかのように「あー」と声を出してアピールする。やがて、ハイハイやつかまり立ちができるようになり、活動範囲が広がってくると、保育者の膝の上を目指してハイハイで移動し、抱っこを求めている。保育者の声の調子に合わせて音や声の強弱も真似るようになり、話し掛けるかのように喃語を発する。保育者は、抱っこで向かい合うことで、歌いながらスキンシップをとったり、声に変化をつけながら喃語に答えたりし、言葉の獲得に繋げていくと共に、様々な音（声）を聴かせることで、音楽的な経験も積んでいけるようにしている。



【楽しい雰囲気作り】

活動範囲が広がってくると、自ら玩具を触りに行こうと探索行動が始まる。そして、触った物は何でも口に入れてなめたり噛んだりしようとする。物の形や軟らかさを確かめているようだ。その時、たまたま触った玩具から音が出ると不思議そうにし、どうして音が出たのか、もう一度振ったり叩いたりしながらいろいろな動きを試し、音を出してみようとする。そして、音が出る動きを発見すると、より興味を持って何度も繰り返して音の出し方を学習している。このように、自分自身で音を発見する経験を通して、音に対する集中力や識別力を養っていくことになる。

また、この頃には手あそびにも興味を持ち、歌や動作を模倣したり、絵本などの話に興味を持ち、読んでもら

ったりすることで、保育者の言葉の抑揚も楽しむようになる。子どもは繰り返しのあるあそびが大好きだ。例えば、手あそびやうたなど、気に入った音やリズムを何度も聴きたがり、繰り返してもらうことを喜ぶ。



『音を楽しむ』と書いて『音楽』と言われるように、乳児期では、いろいろな音に親しみ、興味をもてるように、『楽しい雰囲気を作る』ことが何よりも大切だといえる。人は音楽を聴くとリズムに合わせて自然に体が動き始める。リズムに反応するときに身体的な動きを伴うのが自然な現象である。乳児期の子どもたちも、馴染みのある音楽を聴くと体を揺らしてリズムに乗り始める。自然と体が動いている様子を見るだけで、楽しんでいることが伝わってくる。



音や目で見えるものの動作を模倣する能力が著しく発達するようになってくると、つかまり立ちをしながらリズムミカルに体を動かし、踊りに興味を持つようになる。やがて、歩行がしっかりとしてくると、保育者の動きを真似ながらダンスや体操も楽しめるようになってくる。このように、リズムは音楽を成立させている要素のひとつだといえる。音に気付き、音のリズムとある種の音色や狭い範囲の音域に反応することから、原初的な音楽表現が始まる。様々な音に出会い、多様な生活経験を行うことで、豊かな感受性が育まれていく。乳児期に、大人とのコミュニケーションを深めていきながら、音やリズムに気付き、弱音と強音の変化や高音と低音の違いを感じとる経験を繰り返すことで、適度な音量と美しい音質が識別できるようになる。弱音に気付かせ、聞く事に全神経を集中できるような経験を積むことが、ゆくゆくは幼

児クラスで行う合奏へとつながっていくことになる。乳児クラスでは、『音楽活動』と言うようなかしまった事はしていないが、あそびの中で自然な形で音楽を取り入れ、いろいろな音に興味をもてるように保育を行っている。

【楽しさの“連想”と“連奏”】

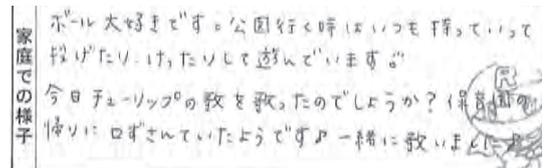
1・2歳児クラスでは楽しい雰囲気作りを心掛け、保育中に子どもたちの好きな歌や音楽を流している。クラスで歌っている童謡が聴こえてくると、子どもたちが鼻歌を歌ったり、体を動かしてリズムをとる姿が見られる。登園の際、保護者と離れて泣いてしまう子ども、大好きな曲を聴けば泣きやみ、職員に抱っこされながら落ち着きを取り戻していた。楽しい印象が残る曲を聴くと、悲しみという感情から喜びに近い感情に変わると考える。自分にとって楽しいイメージがある曲にはそれに伴って嬉しそうな行動や感情で表現される。

5月、子どもたちがこいのぼりの空を泳ぐ姿を見ると、「屋根よ〜り〜た〜か〜い、こいの〜ぼ〜り〜♪」と歌いだした。また違う日には、給食で出た野菜を見て、その頃楽しんでいた野菜の手あそびを口ずさんだ。雨上がりの園庭にとんぼが飛んでいた時には、『とんぼのめがね』を歌い、周りにいた友だちも「ぼくも歌う！」と言わんばかりに一緒になって歌っていた。歌の輪が広がり、まるで2歳児クラスの大合唱だった。このように、この頃の子どもたちは目に入った事象に対し、見たままを素直に歌へ連想させ楽しみながら表現している。そしてそれが連鎖反応を起こし、友だちも歌いだす。子ども同士で歌を楽しんでいる姿だった。



保護者にとっては、送り迎えの時間というのは子どもたちとのコミュニケーションの時間でもある。2歳児にもなると、園でのこともたくさん話すようになる。中には保護者が聞いてもあまり話せない子どもたちもいるだろう。当園では『おいたちの記』という保護者と担任の交換日記のような、子どもの成長や園での様子を毎日伝え合うノートがある。そこにクラスで歌っている童謡なども紹介する。すると、ある日の帰りの自転車の後ろで、『おいたちの記』で紹介されていた童謡を子どもが歌っていると無意識に保護者も口ずさんでいたというのだ。会話ではなく、ただ子どもと一緒に歌を口ずさむ。何気

ないことだとだが、その瞬間でも親子のコミュニケーションにつながるひとときだったろう。流行りの歌も良いが、当園では誰もが知っているような童謡も季節に応じて大切に歌っている。この親子も童謡でなく流行りの歌だったならば、一緒には歌っていなかったかもしれない。世代を越えて共有できる歌を子どもたちに伝えていく意味を改めて感じる事ができた。



3. つながり

5歳児になると、運動会ではマーチングを行う。合奏ほど使用する楽器は多くないが、当園では大太鼓、トリオ、シンバル、ハイハット、小太鼓、中太鼓という楽器、そしてカラーガード（旗）を持ち、楽曲に合わせて2曲を披露する。どの楽器にもそれぞれに大切な役割があり、どれも欠けてはいけないパートとなるが、5歳児とはいえ、すぐに2曲を完成できるわけではない。そこには積み重ねた経験が子どもたちの中にはあった。

～3歳児～【実践】

子どもたちの身近な動物や野菜、果物の絵カードを使い、簡単なリズムを楽しんでいく。

(手拍子) (手拍子)
「トン うん トン うん」

(手拍子) (手拍子) (手拍子)
「ト・マ・ト うん」

トン、ト・マ・トの部分を手拍子になる。これらを子どもたちが声に出しながら手拍子をつけて進めていく。



「うん」というのは4分休符のことで、リズムの休む部分も手を使いながら表現していく。普段の保育の中で

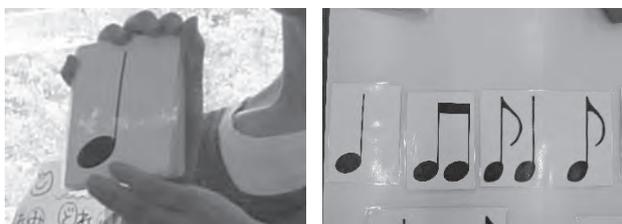
も手あそびと同じようにすることで自然と身につけていくようにし、2月の発表会ではトライアングル、タンバリン、鈴、中太鼓など、打楽器を中心に、主に4分音符で構成された合奏をしている。

3歳児であっても、合奏をするということは理解力、記憶力、集中力、協調性など、これから生きていく上で子どもたちに必要な様々な要素が必要。しかし全員に音感、リズム感、理解力があるわけではなく一人ひとりに差があるのだが、その子に合った楽器を選択することで「楽器を鳴らすことってこんなに楽しいんだ！」という気持ちが芽生えるようにしていく。この時期に苦手意識を覚えると、今後の合奏の練習や小学校に進学しても嫌々取り組むことになってしまう。自分が鳴らした楽器の音が曲の一部となり、友だちと音を奏でるとことこの楽しさも感じていくようになる。



～4歳児～【実践】

ひとつ学年が上がると、絵カードから音符カードに変わり、八分音符も登場する。子どもたちはカスタネットを持ち、職員は音符カードを次々にめくっていくと、その音符に合ったリズムを打っていく。例えば、四分音符であれば、「タン！」八分音符であれば「タタッ！」と2回たたく。声を出しながら進めていけば覚えていくのも早い。



うたを歌う前は足を少し開き、ピアノの音に合わせてつま先を上げたり、肩を上下して身体の緊張をほぐしリラックスしながら歌える準備をする。その次は発声練習

を行う。子どもたちが親しみやすい果物の名前を音程に合わせて保育者と交互に歌っていく。

例： 保「も～も♪」 子「も～も♪」

保「いちご～♪」 子「いちご～♪」



4歳児では元気で声が大きければ良いという考えではなく、声の大きさも自分たちで調整しながら歌えるようにする。低い音程は大きな声では出しづらい。そこで、「音が低くなったら声の大きさも少し小さくしてごらん？」と声を掛けると、子どもたち自身で意識しながら声量を抑えることで、音域の幅が広がりを見せる。音楽活動の際、鍵盤ハーモニカを主に使っていくが、初めは同じ音を連続して吹いたり、順番に音階が上がっていくような曲から練習していく。その際、タンギングや指の押さえ方なども同時に覚えていく。

4歳児は2月の合奏に向け、木琴、鉄琴、キーボード、打楽器類などの様々な種類の楽器を見て、触れながら「やりたい！」と思うものを自分で選ぶ。

やらされるのではなく、子どもが自らやってみようという気持ちに取り組む姿勢を変えている。



4. 5歳児になって

マーチングの練習をしているとプレッシャーを感じ、投げ出したくなる子もいるが、励まし励まされを繰り返し“友だち”という大切な存在や、“心をつつにして創り上げていく”という素晴らしさに少しずつ気付いていく。誰か一人でも何かにつまずいたり、立ち止まった時に皆で話し合う機会をつくったり、モチベーションを上げる言葉掛けを保育者がどれだけできるかも重要となってくる。一人ひとりが主体となって意欲的に楽しく取り組めるように。そして、小さな頃から一緒に同じ時間を過ごしてきた大切な友だちと心をつつにして演奏した時に、心から感動できる経験をすることが一番の目的である。

【卒園児のことは】

今年の夏期に卒園児（小学4年生 男子）がボランティアとして5歳児の手伝いに来た。子どもたちはマーチングの取り組みに精を出していると、取り組み中に小学生の卒園児が「上手くできてるで！」と褒めるだけでなく、「保育室はクーラーあって涼しいけど、グラウンドで取り組みが始まったら暑くて今より声出ないよ！出せるだけ頑張っとうそ！」と、この卒園児が年長児の時に保育者が声掛けしていたような言葉掛けを自然にする姿がみられた。「暑かったことは覚えてるけど、それ以上にみんなの心が一つになった時の気持ち良さとか、たくさんの人に褒められた時の嬉しさとかの方が印象深く覚えている。大切な思い出やから忘れへん！」という言葉が印象的であった。

【発見する喜び】

3、4歳児の活動が積み重ねとなり、5歳児になると運動会ではマーチングを行う。“バチはハの字を意識して”“太鼓の真ん中を叩く”や、“バチが太鼓の面に触れる瞬間に強く叩く”ことなどの基礎を大切にしている。正しい叩き方をした時とそうでない時の音色や、叩き方の強弱で音が変わることなど、子どもたちが自分で気付けるように、“音”で問いかける。すると子どもたちは静かに集中して耳を傾け、「さっきのほうが音が強い！」や、「今の音は優しい音に聴こえる！」など、自分なりの言葉で音の違いを聴き分けている。

リズムは声・手拍子・カスタネットに合わせて、最後に楽器を演奏する。いざ、全ての楽器で合わせてみるとテンポが遅くなったり速くなる。そこで、曲を自分の耳でしっかりと聴くことの他に、“指揮をみること”を伝える。保育者が「友だちと楽器を合わすには指揮者も見るんだよ」と話すと、自分たちで見て合わせようとする姿が見られる。しかし、常に指揮者を見ては隊形によっては体は横を向いているのに顔だけが前を向いてしまう。「どうすれば良い？」と子どもに尋ねても返答がない。そこで、「顔は動かさず、目だけ動かしてごらん。横にいる友だちが見える？」と聞くと、「見える！」「こういう見方でも横くらいまでは見える！」と次々に声があがった。隊形によっては見ることができない状況もある中で、首を動かさず視線だけでチラッと見るような、普段の生活の中であまりしない目の動かし方に子どもたちが意識的に気付いた瞬間だ。日常生活の中で大人にとっては些細なことも、子どもたちにとっては新しい“発見”となるものがたくさんある。様々な場面で保育者がどのような言葉や行動で子どもたちに発見できるヒントを伝えていくことができるか。保育者の資質向上にこれからも努めていかなければならないと感じた。



【音の響きを感じる】

5歳児になると体力もつき、運動面も発達してくるため、逆上がりができるように目標を立てたり、長い距離を歩いて遠足にも行く。あそびの中ではおにごっこなどルールのある集団ゲームをしたり、全身じゃんけん、友だちと協力する手押し車や雑巾がけをしたりと楽しみながら体力・身体作りをしている。その延長線に和太鼓演奏もあり、左足の膝を曲げて立つ姿勢を保ったり、強くたたかないと響かない和太鼓はリズム感だけでなく体力、集中力、バランス感覚などが必要と考える。

簡単なリズムで和太鼓を叩き、正しい姿勢・打ち方を習得していくが、リズムを覚える時は「ロケットドンドンとんでいく」など、リズムを歌に置き換えて楽しく取り組める様に工夫している。初めは数分しか持続しなかった集中力も長い間集中できるようになり、また、一定のテンポを保てるようにもなる。



和太鼓の音を聴き、子どもたちにどんな音だったか聞いてみた。

「心臓にめっちゃ響く！」と驚いた様子だ。耳で音を聴くことは当たり前だが、身体全身が“響き”を感じるという経験はあまりないと思う。和太鼓をしていると、子どもたちは友だちと鼓動を創り上げていくことを楽しみながら、和太鼓の響きが子どもたちの心を揺さぶり、魅了しているように感じた。

当園の発表会では5歳児クラスでは珍しい『カスタネット奏』を取り入れている。カスタネット＝気軽に楽しめる楽器として幼い頃から使用してきたが、子どもたちの成長と共に表現の仕方も成長する。赤ちゃんの頃は太

人が叩き、聴かせたり、手・足・お腹など身体の様々な部位にカスタネットを触れさせ感触や音に反応することを楽しんできた。乳児クラスでは自ら叩き、喜びなどの感情をリズムで表現してきた。3歳児からは利き手とは反対の中指にゴムを通し、掌で叩くなどの正しいカスタネットの使い方を知り『う・さ・ぎ』などと単語のリズムあそびから始めてきた。そして5歳児では一定のリズムを正確に刻むパートと、早打ちとよばれるとても速いリズムで表現できるまでになった。ひとつひとつの音は小さいが、友だちと音だけでなく心を重ねることで、たくさんの方の心に大きく響く音色となった。



5歳児になると、友だちとの関係も深まってくる。一緒に遊ぶ中でけんかもあり、子どもなりに葛藤が生まれることもたくさんあると思う。それでも、小さい頃から一緒に過ごしてきた友だちはかけがえない存在。マーチングや和太鼓などに限らず、友だちと気持ちを合わせながら様々なことにチャレンジしようとする子どもたちの姿は、乳児の頃を思い出すと本当に成長を感じることができた。

“ひとりみんなのために みんなはひとりのために”
友だちと力を合わせて乗り越えたこと。諦めずに取り

組む経験は、必ず自分の自信に繋がると信じて…。

5. おわりに

今回、課題研究部門の『遊びと学び』へ応募するにあたり、普段の保育・教育や、子どもへの関わり方、遊び方等が子どもの学びや音楽という大きなテーマにどう繋がっているのか職員で再認識し合う良い機会となった。

何のために音楽活動をしているのか。行事のため？親のため？

それは違う。音楽は音やメロディー、リズムを楽しみ、子どもたちの持つ豊かな感性と個性を響き合わせるもの。その裏にはそれぞれにドラマがあり、保育者と、親と、友だちとをつなげるものがある。

今回のように職員で話し合うことで『音楽の力』をより深く捉えられることができた。

“音を楽しむ”

楽器が上手であることがすべてではない。子どもたちにとっての音楽とはクラスの雰囲気を楽しくさせるものだったり、表現やコミュニケーションのひとつだったりする。年長児の合奏や和太鼓、マーチングには見応えはあるが、“頑張ればできるという自信”“できなかったことができるようになった時の喜び”そして、“友だちと心をつなげて創り上げていく”という感動を、子どもたち自身で感じる経験を大切にしていきたい。これから生きていく上で、園での経験が少しでも糧となれば嬉しい限りであり、これからも音楽に限らず、保育・教育に様々な工夫をしながら未来を担う子どもたちと関わっていききたいと思う。

講評：「0から始まるド・レ・ミ♪」

評者：井桁 容子

本研究は、普段の保育・教育活動を振り返り、“子どもたちにとって音楽とはなにか” “どのように音楽が取り入れられ、それがこどもたちにどのような影響を与えているか”について研究、実践、考察を進めるとあり、さらに、0歳児から音を通じたかかわりが保育者との信頼関係の構築や親子でのスキンシップにどのような形でみられるのかを要点を絞って考察するとあり、研究の着眼点が面白く問題提起が明確で期待できた。しかし、残念ながら研究テーマと実践内容の考察に一致が見られず、0歳児の実践と振り返りに絞り込まれていなかった。また、0歳児の個人差等への認識があれば、「赤ちゃん」という表現でひとくくりにできないことに気付くはずであるので、その点において本研究が乳児の保育実践に対する姿勢を再度振り返る機会になり、“0歳児にとっての音を通じた関わりとその意味”について実践に生きる研究になるとその意義が見いだせるに違いない。

評者：岡田 澄子

題名からして楽しそうだなと期待を持って読み進めていきました。

文章に合った写真が添付されていて読みやすかったですが、0歳児は月齢も記載するとなお良かったのではないかと思います。

友渕児童センターでは、5歳児クラスになるとマーチングや和太鼓演奏があるようですので、0歳児から音楽（リズム遊び）を楽しむその経験の積み重ねが重要なのでしょう。

子どもの様子、保育者間の取り組みなどの記載が少なく詳細には分からなかったのが残念です。しかし、子どもたちが「音を楽しみながら」頑張

ればできること、友だちと心をつなげて創りあげているのだということは察することができました。

何のために音楽活動をしているのか。音楽は音やメロディ、リズムを楽しみ、子どもたちの持つ豊かな感性と個性を響き合わせるもの。保育・教育に様々な工夫をしながら未来を担う子どもたちと関わっていきたくと筆者は思っています。保育とは正にそのようなものだと思います。今後も継続して取り組んでいかれることを期待します。

評者：日吉 輝幸

音楽は人間を豊かにするものであると筆者は思っている。心と癒される音楽もあれば、気分が高揚させられる音楽もある。また、音楽からは様々な知識を得られることもあり、“音学”と言える側面も持っている。

本研究でも、音楽を人類の文化ととらえ、乳児期からの音との関わりについて研究されている。レポートには何度も「音を楽しむ」という記述があるが、乳幼児期の子どもにとっての音楽は、文字通り「楽しむ」という経験が必要であることは言うまでも無い。本研究は、0歳から5歳までの年齢で様々な実践を行っていることが記述されているが、残念なことに応募要領を大幅に超えたレポート量であり、そのせいか研究の要点が絞り込めていないと感じられた。また、研究テーマと研究内容の関連性が分かりづらく、筆者自身テーマ設定の難しさを改めて感じさせられた。しかしながら、友渕児童センターでは、日常の保育の中で子どもたちが「音」や「音楽」と接することを、とても大切なことと位置付けていることが読み取れ、大いに評価するものであったことを申し添える。今後も子どもたちと共に、「音を楽しむ」活動を続けていかれることを期待している。